

第25回日本水大賞 応募用紙

(整理番号：)

活動の名称	アラカワ(キュウトネガワフクム)リュウイキノ スコヤカナミズジュンカンヲ メザシテ 荒川(旧利根川含む)流域の健やかな水循環を目指して ——流域の水の情報誌発行や田んぼ再生保全活動の実践——									
記入年月日	活動主体					活動分野				
2022年10月28日	該当する活動主体に○ (1つまで)					主な活動分野に◎ (1つまで) その他関連する活動分野に○				
	学校 ()	企業 ()	団体 (○)	個人 ()	行政 ()	水防災 (○)	水資源 (○)	水環境 (◎)	水文化 (○)	復興 ()

活動主体の概要

活動主体の名称 (個人応募の場合は個人名)	ニンテイ エヌピーオーハウジン ミズノフォルム 認定NPO(特定非営利活動)法人 水のフォルム									
代表者名 (団体の場合)	フジワラ トモコ 藤原 梯子				設立年月日	2001年5月5日				
所在地	サイタマケン サイタマシ ウラワク 埼玉県 さいたま市 浦和区									
主な活動地	荒川・利根川上流域									
組織の概要 (個人の場合は履歴を記入)	流域単位の「総合的水管理」について言及した平成8年国の河川審議会答申パンフレット作成に編集者として関わった当NPO理事長が、流域の多様な水及びそのつながりを、機関誌を通じて広く啓発普及するNPOを立ち上げ、併せて流域の水理解に不可欠な農業用水理解のために田及び水路管理の実践活動を開始し、いずれも20年余続けて今に至る。									

応募活動の概要：(文字サイズ10.5pt～、300文字以内で記入して下さい)

埼玉県から東京都に及ぶ荒川(旧利根川含む)流域を流れる水の全体像把握を目的に、まず専門ごとに管理されている水をそれぞれ年1冊発行の機関誌『水のFORUM』にまとめた。次にそれらを集約することで水のつながりを理解しやすくするため機関誌各号を合冊し、『荒川流域を知るⅠ、Ⅱ』にまとめた。前半10年の1～10号は、荒川河口から順次上流に遡り、その土地ならではの水の現象・管理を地形や歴史から紐解き、『荒川流域を知るⅠ』にまとめた。後半10年の11～20号は、それまでの学習を補完しかつ横断的解釈を加え、その合冊本『荒川流域を知るⅡ』では、既得の学びを駆使し、埼玉県にとって不可欠な八ッ場ダムの頁を補遺として加えた。

応募活動のアピールポイント：(文字サイズ10.5pt～、箇条書き100文字以内で記入して下さい)

- ・ 専門家を含む一般市民協力の下、活動を継続し、流域の多様な水とそのつながりを俯瞰する冊子にまとめ得たこと。
- ・ 農業用水理解のための水田保全活動が多面的機能を発揮し、「流域治水」においても貢献できたこと。

これまでの受賞歴：

- 2011年「緑の愛護」国交大臣表彰受賞
- 2012年「みどりの日」環境大臣表彰受賞
- 2021年「埼玉県多面的機能推進会議」モデル地区表彰

※日本水大賞における

これまでの応募実績：第(16)回に応募 受賞歴：第(16)回(市民活動賞)賞受賞

「日本水大賞」をどこで知りましたか？(数字に○印を付けて下さい)

1. 新聞広告
2. 官庁内ポスター
- ③ 3. 日本河川協会ホームページ
4. 水大賞事務局からの案内
5. 国の機関からの誘い
6. 県・市町村からの誘い
7. 教育関係機関
8. 日本河川協会ホームページ以外のインターネットの情報
9. その他 ()

(整理番号：)

活動の概要**目的：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）**

流域単位の「総合的水管理」が望ましいことを知り、それを機に日本の水法専門家に学び、「流域庁」を設置する海外にも取材し、将来、日本の人口減少下社会では総合的水管理が合理的であると理解した。しかしその実現には、特に歴史的背景をもつ農業用水分野とのすり合わせや海水以外の水の「公水」化等の難題が控えている。

それらは管理上の壁だが、水を使用する市民の理解に基づく合意も不可欠である。しかし市民は今や安全と便利な暮らしに慣れ、その多くの水理解は蛇口の水にとどまり、さまざまな学習機会を得ても、その情報源が専門ごとのため、その水が日々の暮らしにどのように関わり、日々の暮らし方が流域の水にどのように影響を与えるのか、考えが及ばない。

まさに答申で言われた“人と水との関わり方の再構築”が必要であり、そのためには専門性に分断された水を再度つなぐ作業とその情報発信が必要であり、それには専門性を超えた立場からでなければならぬとして、最初は専門ごとになるが、それを継続することで横断的、総合的水理解に進められるよう、情報誌を継続して発行するNPOを立ち上げた。

流域に暮らす市民が流域を流れる水を理解し、洪水や渇水等異常時には強靱で、かつ平常時には流域の健やかな水循環に資する暮らしの実現を目的とするとともに、将来的には総合的水管理の実現を望む。

内容：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）

一介の市井の人間が水について情報発信するには、あらゆる水をさまざまな手法で学ぶことから始めなければならなかった。特に農業用水は分かりにくいいため、遊休農地解消として田に入り、米作りや末端用水路管理等を実践しながら理解に努めた。

【学びと情報発信】**2001(H13)年度～**

- ・『荒川総合調査報告書』『利根川百年史』『利根川治水の変遷と水害』『葛西用水史』『日本地名大系』等々に学び、現状把握には行政等関係機関を取材し、機関誌『水のFORUM』発行・配布
- ・機関誌1～10号、11～20号をそれぞれ合冊し、『荒川流域を知るⅠ、Ⅱ』を発行配布
- ・機関誌作成を通じて学んだことを各種市民講座や河川・水・農業用水等管理者向けに講義

2011(H23)年度～

- ・水に関する知識をより深めるため、専門家を招いての市民講座「さいたま・水とみどりのアカデミー」開設運営。アカデミー講義録を新書版にまとめて発行配布

2013(H25)年度～

- ・水を造り、洪水を制御するダムを理解し、移転してくださった方々に感謝する「上下流交流会」実施

【農業用水理解のための実践活動】**2001(H13)年度～**

- ・さいたま市中央に残る通称「見沼田んぼ」で、水・物質・自然を循環させる土地の循環型伝統農法を踏襲する稲作で遊休農地の再生保全。それに不可欠な見沼代用水末端の管理。（現在1.5町歩＝15,000㎡）

2008(H20)年度～

- ・田に接し放置された斜面・平地林を循環型伝統農法に不可欠な里山（農用林野）に再生保全。（1.3ha＝13,000㎡）

・上記活動は機関誌『水のFORUM』、その合冊本『荒川流域を知るⅠ、Ⅱ』配布のほか、水のフォーラムのウェブサイト、及びFacebookでも情報発信。

- ・市民講座や水に関わる団体・行政等で年数回の講義。

- ・現在水のフォーラム会員数約100名（賛助会員含む） 実践活動参加者年間延約1,000名（一般募集含む）

活動期間 自2001年4月 ～ 至2022年11月（通算 21年 6ヶ月）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入して下さい。

1992年(平成4年)～

編集者として、水道の水・河川・ダム・河口堰等のパンフレットや冊子作成に関わり、水に関する知識を習得。

(整理番号：)

<p>活動の必要性・緊急性：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）</p> <p>水は多岐に及ぶため専門性に分けて管理されている。そのため水の情報も専門ごとに分かれ、市民の理解も個別のものにとどまり、水を使う場面では上流に感謝し、下流に配慮する意識が、洪水防御の観点からは、上流を視野に入れた危機意識、下流に及ぼす影響を理解できていない。</p> <p>治水・利水面でも、また環境の観点からも、流域の水のつながりを理解し、市民の自助・共助能力を高めることが望ましいが、その情報発信には専門性を外したスタンスが必要であり、それを担えるのは専門家以外で水を見つめる存在が必要と考える。</p> <p>さらに水災害激化が顕著になってきた今、市民が水をよく理解しておくことは緊急の課題でもある。</p>												
<p>活動の効果・社会への波及効果：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機関誌は、荒川（旧利根川）流域の多様な水及びそのつながりのとりまとめ資料として評価されている。特に合冊本の『荒川流域を知るⅡ』は埼玉県知事に献本することとなり、総合的水管理の重要性について知事と意見交換する機会をいただいた。 ・農業用水を含む流域の水に関する講座も評価され、市民団体や行政等専門組織からの講義依頼も多い。 ・見沼田んぼでの実践活動では年間延べ約1000名の市民が参加し、田が有する多面的機能をもって都市環境に貢献し、また折に触れての語りかけで、市民の流域の水への意識向上にも寄与している。 ・近年の激甚な豪雨・洪水災害を受けて「流域治水」の取り組みが進められているが、令和元年の台風19号を筆頭に当該活動地はしばしば「遊水地機能」を果たし、地域防災にも貢献している。 												
<p>活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦勞された点：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）</p> <p>【工夫した点】</p> <p>各種年表作成： テーマごとに、社会の動向と併せて水に関わる諸事業を項目に加えた年表を作成。特に近世は、江戸の町づくりの進捗（将軍名含む）と後背地の色分けした河川・農業用水路整備（事業者含む）を時系列で一覧にしたことから、江戸の発展と後背地の基盤整備の関係、またその基盤整備における河川・用水路・舟運路整備の関係を示した。</p> <p>流路図の作成： 可能な限り精密にトレースした地形図に時代の変遷に関わる河川や農業用水の流路図を重ねた図を作成。特に近世の流路図は6枚になったが、後背地で行われた河川・用水路整備がいかに江戸を支えたかを分かりやすく示した。</p> <p>【苦勞した点】</p> <p>仮説ゆえの見解の相違や年号の齟齬、また河川管理図・用水路管理図の誤差等、そのすり合わせに関係資料を増やして総合判断したこと。</p> <p>実践活動では、法律の壁を越え、農家及び集落の信を得るために、少なくとも十数年は要したこと。</p>												
<p>活動の今後の計画：（文字サイズ10.5pt～で記入して下さい）</p> <p>次は、これまで学び得たことを広く一般に活用する段階に進みたい。そこで、荒川（旧利根川含む）流域に居住する小学校高学年を対象に、「私のまちに流れる水」作文コンクール5ヵ年計画を立ち上げた。</p> <p>実行委員会委員には、国土・河川・水・農環境・まちづくり等の専門家に承諾していただき、現在、募集要項等準備中。その概要は、子どもたちが身近な水を捉え、その水がどこから来てどこへ行くのか、そこでの疑問や気づき等を各関係部署や機関に取材し※、考え、図と作文にまとめてもらう。</p> <p>※関係機関への橋渡し、及び審査は水のフォーラムで行う。</p> <p>なお、作文コンクールの副賞も兼ねた『埼玉の川の履歴書』出版や講演・講義等を通じての情報発信、併せて「見沼田んぼ」での実践活動も継続する。</p>												
<p>応募推薦者（必要な場合にご記入下さい）</p> <table border="1"> <tr> <td>氏名</td> <td>大東淳一</td> <td rowspan="2">推薦の言葉：荒川流域の強靱かつ健やかな水循環の重要性について、市民にも分かりやすく情報発信されている。田んぼでの再生保全活動も多く市民の参加を集め、流域の水循環の理解向上、都市における「流域治水」の先進事例となっている。20年以上にわたる活動の継続が果たしてきた役割は大きいものと評価する。</td> </tr> <tr> <td>所属</td> <td>荒川上流河川事務所 所長</td> </tr> <tr> <td>氏名</td> <td>木村眞司</td> <td rowspan="2">推薦の言葉：流域の水循環の一翼を担う農業用水理解のための「見沼田んぼ」での活動も20年余に及び、活動を通じて農業用水や田が有する多面的機能保全の重要性について、都市住民への啓発普及に努めたことを評価している。</td> </tr> <tr> <td>所属</td> <td>埼玉県農林部 農村整備課長</td> </tr> </table>			氏名	大東淳一	推薦の言葉：荒川流域の強靱かつ健やかな水循環の重要性について、市民にも分かりやすく情報発信されている。田んぼでの再生保全活動も多く市民の参加を集め、流域の水循環の理解向上、都市における「流域治水」の先進事例となっている。20年以上にわたる活動の継続が果たしてきた役割は大きいものと評価する。	所属	荒川上流河川事務所 所長	氏名	木村眞司	推薦の言葉：流域の水循環の一翼を担う農業用水理解のための「見沼田んぼ」での活動も20年余に及び、活動を通じて農業用水や田が有する多面的機能保全の重要性について、都市住民への啓発普及に努めたことを評価している。	所属	埼玉県農林部 農村整備課長
氏名	大東淳一	推薦の言葉：荒川流域の強靱かつ健やかな水循環の重要性について、市民にも分かりやすく情報発信されている。田んぼでの再生保全活動も多く市民の参加を集め、流域の水循環の理解向上、都市における「流域治水」の先進事例となっている。20年以上にわたる活動の継続が果たしてきた役割は大きいものと評価する。										
所属	荒川上流河川事務所 所長											
氏名	木村眞司	推薦の言葉：流域の水循環の一翼を担う農業用水理解のための「見沼田んぼ」での活動も20年余に及び、活動を通じて農業用水や田が有する多面的機能保全の重要性について、都市住民への啓発普及に努めたことを評価している。										
所属	埼玉県農林部 農村整備課長											